

将軍が行く！

イチ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——陛下は、外の世界をご覧になられたことはありませんか？  
その將軍の何気ない問いかけが、幼き皇帝の目を覚めさせた。

目次

第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
48	36	27	19	11	1

## 第1話

——陛下は、外の世界をご覧になられたことはありますか？

將軍にそう問いかけられ、皇帝はふと疑問に思った。

そういえば自分は、これまで一度もこの外の世界を見たことがない、と。

大臣のサポートもあって幼くして皇帝の座に就いた皇帝であったが、実質的な政治業務は大臣が全て行っており、皇帝と言っても自分はただ大臣に言われた言葉をただそのままに皆に伝える伝令役ではない。

しかし、そのことに不満はなかった。幼い自分にはまだ国をまとも上げる実力がない——未熟者であることは理解できていたし、国家の安定と平和を心より願うからこそ、優秀な大臣に全てを任せることが何よりも国のためになると判断していたからだ。

そこには幼き故の裏表のない純粋な思いしか無く……それ故に物事の『裏側』を見る目が養われていなかった。

幼き皇帝の世界は宮殿の内側のみで完結していた。

国の現状については大臣をはじめとする家臣からの報告しかなく、実際にその目で外の世界を、そして国の現状を見たことはなかったのだ。

普通なら何かおかしいと気づくだろう。なぜ自分は一度も外の世界を見たことがないのか——見られないよう仕向けられているのか、疑問に思うだろう。

しかし、生まれながらにして一度も外の世界に出たことがない皇帝からしてみれば、外に出られない自分の立場はあくまで日常で、当たり前の光景だった。

だからこそこれまでの人生で何の疑問も抱かずにここまでやってきた訳だが、その將軍の問いかけは幼き皇帝の心に波紋を投げかけた。

そして一度生まれた幼くも純粋な好奇心は止められるはずもなく、気が付けば皇帝はその將軍に向けて告げていた。

——外の世界が見てみたい、と。

皇帝のその言葉を將軍は、普段の凜々しい表情とは一変した聖母のような微笑を浮かべて快く引き受けた。

十十

しかし大臣より勝手な外出を禁止させられているその身とあつては、宮殿の外に出るにはその大臣にばれないよう誤魔化さなくてはいけなかった。

もしばれたらと不安を隠しきれない皇帝に対し、將軍はご心配は無用ですと告げた。

宮殿を自由に出入りできる侍女の立場を利用し、侍女の纏うローブを調達し、皇帝を侍女に変装させたのだ。幸い皇帝は幼い故に小柄で童顔であつたため、少し化粧をして整えれば、一介の侍女に成り得た。こうして皇帝は將軍に連れられ、生まれて初めて宮殿の外に繰り出した。

生まれて初めて見る帝都の街並みは、賑やかさや華やかさに満ち溢れていた。

中央通り沿いに建ち並ぶ、様々な店。

通りを行き交う、老若男女多種多様な人々。

生まれて初めて味わうその活気に圧され、思わず後ずさりしてしまう皇帝を、將軍は慈愛の込められた眼差しを向けて告げた。

「ご心配はご無用です。この私がいるからには陛下に危険が及ぶことはまずあり得ませんので」

それはこの目の前にいる金髪の女性が、あのブドーやエスデスに並ぶ実力を持つ將軍だからこそ、安心できる言葉だった。

將軍の言葉に心にゆとりが生まれた皇帝は、これまで外に出られなかった鬱屈を発散させるかのように街の散策にいそしんだ。外に出られないことを当たり前、と思いつつも心の片隅では無意識に鬱屈が溜まっていたのかもしれない。

散策すればするほど湧き起ってくる疑問。目に入るもの全てが初めて見るものばかりで、皇帝の純粋な好奇心は次々と將軍に質問をぶつけていく。

將軍はそんな皇帝の疑問を手慣れたような模範解答で解消していった。

「この街がこんなに活気に溢れていたとは……ここはこの帝国の中心に相応しい素晴らしい街だな！ 余は満足だ！」

活気に満ち溢れた帝都のその光景は、国が豊かに繁栄していることを意味する。

そう思い至ったのか、無邪気にはしゃぐ皇帝を、將軍は悲しげな微笑みを浮かべてただ見据えていた。

まるで目の前で瞳を輝かせる少年を憐れむかのように。

それから間もなくして、幼き皇帝は過酷な現実を突きつけられることとなる。

「な、んだ……この場所は……？」

それは帝都の外れにあるスラム街だった。

華やかな帝都の中心部とは似ても似つかないみすばらしいその光景を皇帝は信じられない思いで見つめる。

「——これが現実なのです。陛下」

背後からかけられ、振り向くとそこには険しい表情をした將軍の姿があった。

「限られた一部の人間のみが富を独占するが故に、この帝国の大多数の人間が貧困に喘ぎ、苦しんでいるのです」

「しかし大臣は……余にこのようなことは一度も……」

「その大臣が自分に都合の悪い情報は全て握り潰しているのです。だからこそ陛下はこの帝都の現状を知ることができなかつた……」

大臣が陛下に外の世界を見させないよう仕向けていたのもそのためです、と將軍は告げる。

「全ては大臣が己が欲望のために陛下の知らないところで暴政を振るっているのです。あなたが全幅の信頼を置く大臣こそが……この光景を生み出す……この帝国の衰退を招く根源なのです」

「そんな……大臣が……」

そんな馬鹿なことが。

信じられない思いで皇帝の頭の中は一杯だった。

事実、口で言われていただけでは皇帝は如何にこの將軍の言葉といえども相手にもしていなかっただろう。

大臣は自分が皇帝になるために力を尽くしてくれた、言うなれば恩人であり、だからこそ皇帝は大臣に全幅の信頼を寄せていたのだから。

だが、目の前に広がる過酷な光景は紛れもない現実。

嘘だと思いたい。嘘だと言いたい。

だが目の前に広がる光景が、將軍の告げた言葉が事実であるということ告げていた。

そんな皇帝に將軍は深々と頭を下げる。

「――申し訳ありません、陛下……。この光景を見せれば貴方が傷つくことは、この私自身痛いほど理解できていました……。しかし、この悲惨な現状を陛下にお伝えするには陛下に直接、この光景を目にしていたく他なかったのです」

將軍の謝罪に皇帝は暫く言葉を失ったかのように固まっていたが、やがてその口からポツリと、か細い声が掠れ出る。

「余は……余は……」

一番の信頼を置いていた家臣が、帝国を苦しめる諸悪の根源だった。

その事実にはショックを受けたのは言うまでもなく、何よりも皇帝がショックを受けていたのは、そのような大臣の本質を見抜くこともできず、のうのうと帝国の政治を任せてしまった自分自身の判断力の無さにだった。

「余は……皇帝失格だ……!」

皇帝は拳を固く握りしめる。

民の上に立つ指導者として、情けない。

国の安定と平和を願い、願ったからこそその大臣に全てを任せるという判断だったのだ。

自分を皇帝の座に導いた大臣ならば必ずこの国を良き方向に導いてくれると信じて……。信じて疑わなかったからこそ、皇帝は言われるがままに大臣に仇なす存在を処罰し、排除してきたのだ。

それが全て、間違いであつただななんて——。  
幼き事など何の言い訳にもならない。

全ては大臣の言いなり人形であつた自分が——考えることを放棄した自分が一番悪いのだ。

「……余は……これからどうすればいいのだ？」

一番の家臣には裏切られ、幼い自分が未熟者であるという現実は——このままでは国は衰退し続けるという現実は変わらない。

いつしか皇帝は、自分でも無意識のうちにそう呟いていた。

いきなり突きつけられた非情な現実に幼い皇帝の頭はショートを起こし、混乱状態に陥っていた。

見かねた將軍は皇帝の手を優しく取り、その場に跪くと凛々しくも温もりに満ちた瞳で皇帝の顔を見上げた。

「——何も一人で全てを背負う必要はないのです、陛下」

この国にはまだ心の底より国の繁栄を願う將軍たちがいる。

彼らの協力を得て、この国を変えていけばいいのだ。

「——それに私が陛下とお会いした時に告げた言葉をお忘れですか？」

我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。

かつてこの將軍が初めて皇帝に謁見した時、彼の前に跪き、宣言した言葉だ。

その洗練された動作に女子おなごとは思えぬほど凛々しく、けれども可憐なその眼差しは玉座に座る皇帝の心を掴んで離さなかった。

その日のことを皇帝は今でも昨日のことのように思い出せる。

「余の……味方となつてくれるのか……？」

微かに震えるその声は皇帝の内に不安があることを意味していた。

こんな愚かな自分に着いてきてくれる者がいるのだろうか、幼き皇帝の心は不安で仕方がなかったのだ。

そんな皇帝を安心させるかのように、將軍は頷く。

「——貴方がこの国を想う心を失わない限り……私はいつまでも貴方の剣です」

その言葉に頭の中の靄が一気に切り払われたような気がした。



そうだ。こんなところで立ち止まっているわけにはいかない。

本当にこの国の繁栄を望むなら、この身体に鞭を打つてでも前を向け。

最強にして最高の騎士が、こうして自分の剣となる誓いをここに立ててくれたのだから。

「――すまぬ。感謝する」

将軍に感謝の言葉を述べた皇帝は決意を新たに力強く拳を握りしめた。

十十

「よし、では早速、大臣を捕まえ、根掘り葉掘り詳しい話を聞こうではないか！」

「恐れながら、その提案には承諾しかねます、陛下」

場所は変わって帝都・宮殿、皇帝の自室にてそう言つて身を乗り出した皇帝を将軍はその眼差しに若干の口惜しさを滲ませながら止めた。

「なぜだ!? この国の衰退を招く元凶があの大臣であるなら、その元凶を叩くのは当然のことであろう！」

至極当然のことを口にしたつもりだったが、将軍は冷静に皇帝にこの帝都の現状を説明する。

つまり、現状、この帝国における権力のほとんどがオネストに集中しており、如何に皇帝といえど現状、オネストを暴政を止めるだけの力を持っていないということ。

「なっ!? 帝国で一番、偉いのは余ではないのか!？」

「立場だけで見ると確かに陛下が一番、上であることに変わりはありません。しかしあのオネストはたくみな手法で邪魔者を処分して、自分に有利に働く者で周りを固めているのです。もはや立法、行政、司法、そして軍に至るまであのオネストの息がかかっていない所はありません」

「……つまり、たとえオネストを捕まえたとしても、司法にまでオネストの息がかかってる今となつてはもみ消されてしまうということか？」

「物わかりがよくて流石です、皇帝陛下」

將軍に褒められ、嬉しさと恥ずかしさで若干、顔を赤く染めながらも皇帝は「ではどうすればいいのだ？」と言將軍に問いかける。

「まずはオネスト<sup>大</sup>の権力を削ぐことから始めなければなりません。陛下が真実を知った今、オネスト<sup>大</sup>にとつて陛下は邪魔者となったのです。自分のいうことを聞かぬ操り人形は不要、という訳ですね。権力にモノを言わせ、陛下を帝都の裏側で始末する……という可能性も否定できません」

始末。その言葉に皇帝はびくつと身体を竦ませるが、すぐに將軍が「——がそんなことはさせません」と力強く皇帝に告げる。

「陛下の異変に気付いたオネスト<sup>大</sup>が差し向けるであろう刺客からは私がこの命を賭けて守ります。故にまずは陛下は頼れる味方を作ることから始めてほしいのです」

「……味方、か？」

「はい。先ほども言いましたが、この帝都にはまだ心の底からこの国の繁栄を願う者がたくさんいます。その者たちに力を与え、国の改革を行うのがこれからの陛下の使命です」

「余の、使命……」

將軍の言葉に皇帝は不安げに顔を俯げる。

——余にできるのだろうか。今までオネスト<sup>大</sup>の操り人形にしか過ぎなかった余が……。

そう考えてしまうのも無理もない。如何に皇帝というお国で最高の立場にしているといつてもまだ子供なのだ。国を良くしたいという純粹な願いはあっても、それ以上にこれから強大な敵と戦っていることを思うと不安で堪らなくなる。

そんな皇帝の内心を見透かしたかのように將軍が優しく抱きしめ、耳元でそつと告げた。

「大丈夫です。陛下ならきつと、この国を変えられます」

実際、何の根拠があつて、彼女はここまで自信を持っているのだろう。何の実績もない。今までオネスト<sup>大</sup>の操り人形でしかなかったというのに、どうしてここまで希望に満ち溢れた眼差しを自分に向けら

れるのだろう。

しかし将軍がそう言ってくれただけで、不思議と自分の中の緊張が和らいでいく。

「そうだな……余はきつとこの国を変えてみせる!!」

「その意気です、陛下」

意気込む皇帝を見て、将軍は嬉しそうに微笑んだ。

十十

「陛下の朱肉の政策に口を出し、政務を遅らせたのは許されざることですよねえ」

国の内政官であるシヨウイは絶望していた。

この国に。そしてこの国を腐らせる元凶である男——オネスト<sup>大</sup>に。

このままでは自分はおそらく政務を遅らせた咎により、処刑される。

しかし口を出さずにはいられなかった。今の陛下は実際はただの操り人形でしかない。実際はこのオネストが提案したと言っていいこの政策は民にさらなる苦勞を強いらせ、国を衰退を加速させる愚策というほかならないからだ。

ぐちゅぐちゅと肉を頬張るオネスト<sup>大</sup>の傍らの玉座に腰掛ける皇帝陛下の表情に変化は見られない。あと一言、二言、何か口を開けば、もう間違いなく、皇帝より処罰が下されることになるだろう。

しかし、それでも——

「陛下は大臣に騙されております!! どうか民の声に耳をお傾けください!!」

——叫ばずにはいられなかった。このままでは千年にも及ぶ帝国の歴史が途絶えてしまう。

この国を、民を、何よりも愛しているからこそ叫ばずにはいられなかった。

しかし無情にもオネスト<sup>大</sup>は陛下の耳元で甘く猫名声で囁く。

「シヨウイ殿は気が触れてしまったのでございましょう。ここは陛下の一言で楽にして差し上げるのがよろしいかと」

その言葉にシヨウイはギリリと歯を噛み締める。

こんなことがまかり通っていいのか。

オネスト<sup>大</sup><sub>臣</sub>の一言で、全てが決定してしまうこの現状が。

このまま帝国は衰退し、滅びの道を辿っていくしかないのか。全てを諦めかけたその時、皇帝が静かに口を開いた。

「内政官シヨウイ」

シヨウイは力なくその視線を皇帝に向ける。どうか自分のこの想いが届いてくれと一縷の望みをかけて。

「シヨウイ、そなたは余の政策に問題点がある故に口を出したのであろう」

「はっ、恐れながらそうでございます」

「ではその問題点について、もう一度説明してみよ」

「はっ?」

思わずシヨウイは目を見開いた。目の前の陛下が口にした言葉が信じられなかった。

「なっ……っ?」

信じられないような顔をしていたのはオネスト<sup>大</sup><sub>臣</sub>もだった。普段ならここで必ず皇帝はこういった輩を牛裂きの刑に処するといふのに。

しかし、シヨウイからしてみればこれは願ってもみないチャンスだった。ここぞとばかりに身を乗り出し、シヨウイは皇帝に向けて政策の問題点を丁寧に説明し、その改善策を提案する。

「陛下そろそろいいのではないでしょうか? そろそろこの男を……」

「うるさいぞ、大臣。今は余がこの男の話を聞いているのだ。邪魔するでない」

「っ! ……これは申し訳ありませんでした、陛下」

そう言っつてぐちゅ、ぐちゅと肉を咀嚼するオネスト<sup>大</sup><sub>臣</sub>であったが、苛立っているのは明らかだった。

そんなオネスト<sup>大</sup><sub>臣</sub>を余所にシヨウイの話を全て聞き終えた皇帝は「うむ」とうなり声を上げる。

「なるほど、たしかに改めて言われてみるとこの余の政策には改善点が多いようだ。早急に政策の見直しをしなければならぬ」

そう告げると皇帝は力強い眼差しでシヨウイを見据えた。

「しかし余はこの手における知識はまだまだ疎い。余の代わりと言っては何ではあるが、内政官シヨウイ、余の代わりに改めてこの政策を練り上げてはくれぬだろうか？」

「——!!」

皇帝のその言葉にシヨウイは今度こそ今、目の前に広がるこの光景が現実のものであるのかどうか疑った。周りからもどよめきが沸き起こる。

処罰を言い渡さないどころか、陛下は自分に政策の見直しを命じたのだ。これまでの陛下からは考え付かない決断だった。

(陛下はわかってくださった……陛下はわかってくださったのだ!!)

感激のあまり頬を熱いモノが伝う。そんなシヨウイを見て、皇帝は力強く頷く。

「頼んだぞ」

「はっ！ このシヨウイ、全身全霊をかけて政策の改善に努めまする!!」

皇帝に敬礼したシヨウイはその場を後にする。

絶望の闇の中に灯された一筋の光。

シヨウイは自分の中に熱が灯るのを感じていた。

陛下は自分の可能性に賭けてくださった。ならば自分は全力でそのご期待に応えなければならぬと。

周りにはオネストの息のかかった敵しかいないのかもしれない。

それでも戦い抜いて見せると、決意新たにシヨウイは早速、頼まれた政策の改善に取り掛かったのだった。

## 第2話

オーレリアは大將軍であるブドーと同じように、將軍の家系——名門グラデイウス家に生を受けた一人娘である。

もともと病弱であつた母親は、オーレリアを産んだ際に全ての氣力を振り絞つたかのように息を引き取り、帝国の將軍であつた父親は、北の異民族との戦乱で戦死した。

自分を産んですぐに亡くなつた母との思い出はオーレリアにはない。しかし、オーレリアには自分を優しく、けれども力強く導いてくれた父とのかけがえのない思い出があつた。

父はこの国を愛していた。いつかはお前も將軍となり、この国の繁栄の為に陛下を支えるのだと——オーレリアは口癖のようにいつも父に言われていた。

父はこの国を愛していた。だからこそ命を賭けて侵略してくる北の異民族共と戦い、そして名誉の戦死を遂げたのだ。

大好きだつた父が愛していたこの<sup>帝</sup>国<sup>国</sup>。大好きだつた父が最後に守り抜いた、この<sup>帝</sup>国<sup>国</sup>——。

オーレリアにとってこの<sup>帝</sup>国<sup>国</sup>は父が自分に残してくれた最後の忘れ形見だつた。

父が愛したこの国を——陛下を——今度は自分が守る。そんな信念の元にオーレリアは自分を鍛え上げた。

全ては帝国、そして帝国の命である皇帝陛下の為に。もはや愛国心を超えた忠誠は、常人ならば発狂しかねないほどの過酷な修練を耐えさせる原動力となつた。

そうしてオーレリアはかのエスデスやブドーに並ぶ將軍となつた。かつて自分の父も就いていた、その地位に。

オーレリアは国の現状を憂いていた。私利私欲の為に暴政を振るう大臣——オネスト。そしてそんな国の現状を知らされず、ただオネストの操り人形と化した皇帝陛下——。

初めて皇帝に謁見した際、オーレリアは国の繁栄を切実に願う皇帝のその純粋な願いに心を打たれた。どこまでも国を愛する君主に恵

まれて自分は幸せ者だと——だからこそオーレリアは騎士の誇りである自らの剣を皇帝に捧げることを誓ったのだ。

故に許せなかった。皇帝の想いを踏み躪ったオネストが。この剣で斬り殺してやろうかと、一体何度躊躇ったことだろうか。

しかしそれでは意味がない。陛下が自分の意志でオネストを否定し、裁かない限りは何の意味もないのだ。今、オネスト一人を殺した所で必ず第二、第三のオネストが現れる。国の滅亡を招く存在を一網打尽に根絶やしにしなければ全く意味がないのだ。

（というか、そもそもあの<sup>オネスト</sup>デブが陛下の寵愛を受けているのが腹立たしい……私の方が陛下のことをずっとずっと慕っているというのに——）

あのデブには豚小屋がお似合いだ。いつそ第二のオネストが現れてもいいからあの男だけでも殺してやろうか。そんなことを考えたこともあったが、結局はできなかった。

なぜならそんなデブの事を今の陛下は慕っており、今、あのデブが死んだら陛下が悲しむだろうからだ。オーレリアにとつて陛下の悲しむ顔は国の滅亡と同じくらいに見たくないものだった。

——だったら、陛下があのだのデブの事を見限ればいいんですね。

こうしてオーレリアは皇帝を城の外に連れ出し、国の現状を陛下に認識してもらうと同時に大臣が国の衰退を招く元凶であるということとを伝えた。自分が何よりも信頼していた大臣に裏切られた陛下の顔を見るのは心が引き裂かれる想いだったが、これからは自分が陛下を支えてあげればいいのかと無理やり自分を納得させた。これからどうすればいいのだと自分に縋ってくる陛下のご尊顔は、思わず紅き血潮が噴き出しそうになるくらい可愛らしかった。

そしてオーレリアは陛下には公の場を利用し、国の繁栄を願う仲間を増やすことを薦めた。今の帝国はオネストの息がかかった人間が多すぎる。まずはその勢力を削ぐ所から始めなければならぬ。

そのためにはオネストの勢力に負けない一つの勢力を作り出す。内政官シヨウイの一件の時のように、公の場で決定された事は如何にオネストといえども簡単にはもみ消す事はできない。オネストの息

がかかった闇討ち、暗殺からは自分の部隊が身を挺して守ってみせる。

（しかしそれだけでは足りない……オネストあのデブに拮抗する勢力を造り上げるには、オネストあのデブに負けない強力なリーダーの存在が必要ですね……）

「——レリア殿？ オーレリア殿？」

「……はい、申し訳ありません。なんででしょうか？」

オーレリアに言葉をかけて来たのは陛下に命を救われ、政策の見直しを任された内政官シヨウイだった。ちなみにシヨウイの見直した政策はすでに皇帝陛下の名の下、公布され、これまでのものとは思えないその良心的な政策に民衆の中からは喜びと同時に戸惑いも生まれているところだ。まあ、今まで帝国が行ってきたことを思えば当然の事なのかもしれないが。

「いえ、あのオネスト大臣による闇討ちを警戒して、私に護衛を着けてくださり感謝の言葉を述べようと思ひまして。帝国最強の三大將軍の一人である貴女が味方とは私も心強いです」

「とんでもありません。私などまだまだ未熟者です。——それより、護衛は就けましたが、くれぐれも油断はなさらぬようお願いします」

「わかっておりますとも。あの大臣のことだ、如何なる手段を使つて邪魔者を消しにくるかわかりませんですからな」

シヨウイはあの一件後に事の顛末を話し、オネストに対抗する勢力——言うなれば帝国改革派の一員として協力してもらうことになっていた。あの皇帝の決断に心の底から感動したシヨウイは国のため、そして自分を救ってくれた陛下のために惜しみない協力を誓つてくれていた。

「それにしても、オーレリア殿、何か悩み事でもありますのかな？」

「なぜそのようなことを？」

「いえ、先ほどの私の呼びかけへの反応が遅れていたもので、何か考えていた事があるのかと」

オーレリアは少し考える。先ほど考えていた帝国改革派のリー



ダーの件。正直なところ武官であるオーレリアは嗜みとして政治のことにしても一連の学問は修めたが、それでもプロフェツショナルではない。軍に関しては將軍故にある程度の顔も利くが、政治関係の繋がりとすると薄い。

しかし、このシヨウイであればどうだろうか。内政官であるなら、政治的な人の関わりも少なくともこのオーレリアよりはあるだろう。このシヨウイが何かいい人物を知っているのなら、紹介してもらってもいいかもしれない。

とにかく話してみる価値はあると、オーレリアがこの一連の話をすると、シヨウイはううむ、と顎髭をさすった。

「政治的に頼りになる人間ですか……しかし、今はオネスト大臣の勢力が強く、同じ志を抱く者でも報復を恐れて何もできない状況ですからな……」

「そうですね……」

まあ、そうだろう。予想できないことではなかった。

オーレリアが肩を竦めるが、その時、シヨウイが何かを思い出したかのようにパン、と手を鳴らした。

「そういえばひと昔前にチヨウリという良識派に属する男がおりましたな。すでに政界からは引退されていますが、あのオネスト大臣の派閥に属さず、オネスト大臣と対等に渡り合える唯一の人間でした。この私も彼の下、政治学を学んでおりましたが、彼ならもしかしたら……」

その言葉を聞いたオーレリアが静かに口を開く。

「……その彼の現在の居場所はどこかわかりますか？」

「たしか帝国郊外、山奥の村に隠居していると」

「おそらく大臣はもう陛下が自分の都合のいい操り人形ではないことに気付いているはずです。陛下が貴方に政策をお任せになられたことから、大臣は自分の至らぬ水面下で抵抗勢力が生み出されつつあることを悟っているはず」

「あの男の危機察知能力は鼠なみですからな」

オーレリアの言いたいことを全て読み取ったかのようにシヨウイ

は真剣な表情で頷く。

「これより私はチョウリ殿下の下へ向かいます。力になって頂けるかどうかはわかりませんが、この国の現状を話してどうか協力してもらいます。」

——陛下はまだ幼い故に政治面ではまだ疎い所もあるでしょう。シヨウイ殿はそんな陛下の力になってさしあげてください」

「承りました。このシヨウイ、命を賭けてでも陛下の力になることを誓います。……しかし將軍であるオーレリア殿自らが出向くとは、用心深いすな」

「おそらく、そのチョウリ殿はこれから行う帝国の改革の要となる人物となるでしょう。是が非でもこの帝都に無事に辿り着いてもらわねばなりません」

それに、とオーレリアは言葉を続ける。

「嫌な予感がするのです。用心深いオネストの男なら、もう既に手を打つていてもなんらおかしいことはありません」

見た目は豚の癩に、中身は鼠のように臆病者ですから——。

そう言い残し、オーレリアはその場を後にした。

十十

『うるさいぞ、大臣。今は余がこの男の話を聞いているのだ。邪魔するでない』

その言葉を聞いたオネストは、目の前の玉座に座る幼き皇帝のその言葉が信じられなかった。

普通なら立場上は皇帝の方が上の訳で、あくまで表向きは一介の大臣であるオネストが皇帝の話を途中で遮った訳だから、憤慨した皇帝のこの言葉は普通なら何らおかしいものではない。

しかし、皇帝からこの言葉が出ることはありえなかった。だからオネストは驚いた。

先代の皇帝がなくなり、勃発した後継者争い。その中でこの皇帝を帝位につけたのは自分であり、この皇帝はそんな自分を信頼して、政権を全て自分に任せていたではないか。

表向きは大臣の立場からの進言、助言という形を取っているが、実

質、オネストの言葉がそのまま皇帝の口を辿って伝えられているだけであり、オネストにとってこの幼き皇帝は都合のいい操り人形であったはずなのだ。

自分に憤慨の言葉を投げかけるなんて、ありえないはずなのだ。

(いったい、どうしたのでしよう？ 陛下がこの私にこんな言葉を投げてくるなんて……)

苛立ちをそのままにグチャグチャと肉を噛み切りながらも、心は冷静に、オネストは頭を回転させる。

(普段なら私の言葉をそのままにこの男を処刑しているというのに、今はむしろこの男の言葉を率先して聞いているように見える……)

内政官を任されているこのショウイという男は、オネストにとって邪魔者でしかなかった。オネストにとって民とは踏み躪り、税を徴収する弱者でしかなく、周りが自分の派閥に属する中、一人民のための政策を投げかけるこの男は前々から煩わしいと思っていた。

故にこの度のもう我慢ならぬと言わんばかりに政策に口を出してきたのは、オネストにとって好都合ではなかった。陛下の策に口を出し、政務を遅らせた事を口実に、処刑すればいいと。

しかし現実はどうだ？ 何を思ったか陛下は自分の言葉を無視した。あの男の言葉に耳を傾け、さらにはあの男に政策の見直しを命じてしまった。公の場での皇帝による宣言故にもみ消すこともできない。後で不慮の事故としてこの男を始末することができるかもしれないが、しかし現段階でもみ消す事ができない事実は変わらない。

(誰かが、余計な事を吹き込んだんですね……)

政策の見直しを命じた皇帝の言葉に感動して、熱い涙を流すショウイを冷たく睨みながら、オネストは考える。

(とにかく陛下の修正は必要ですか。この男は後で始末するとして……)

しかし、不慮の事故として処理しようにも、ショウイには護衛がついていて、始末することは困難を極めた。

あのブドーの近衛兵にも勝るとも劣らない、白き銀の鎧に身を包ん

だあの騎士たちには見覚えがある。

オーレリア・グラディウス。あのブドー、エスデスに並ぶ、この帝国が誇る三大将軍の一人。あの名門・グラディウス家の一人娘にして、この帝国においてオネストの権威を退ける数少ない人物。

シヨウイを護衛するあの白銀の鎧の騎士たちは、紛れもなくあのオーレリア将軍が率いる特殊部隊に所属するエリートであることに間違いない。

となると考えられることは一つ。陛下に余計な事を吹き込んだ張本人。それは――

(オーレリア・グラディウス……アナタでしたか……)

彼女が敵対しているとなると、物事は思うように進まないのは間違いない。彼女はブドーやエスデスと同じく、グラディウス家に代々伝わる強力な帝具を保有しており、たとえその帝具が無いにせよ、その實力は抜きんでている。暗殺するにせよ、返り討ちにあうのが目に見える。

(ひとまずオーレリア将軍については後回しですねえ……とにかく防がなければならぬのは、私の権威を脅かしかねない新たな派閥の誕生……現段階ではオーレリア将軍、そして内政官シヨウイが敵と言っていていいでしょうねえ)

しかし正直なところ、この二人だけならばオネストの権力を脅かすものではなかった。たしかにオーレリアの軍事力は脅威だが、政治に關してなら彼女は一連の学を修めただけで、素人といってもさほど変わらないからだ。それにシヨウイだけならば、不慮の事故で始末できずともこの先、いくらでも始末する機会はある。

(しかし、それも可及的速やかに行わなければなりませんねえ……) 自分に抵抗する明確な存在が現れた今、影で息を潜めている反オネスト派の人間がいつ名乗りを上げるか分からない。早く見せしめにあの男を殺さなければ、次々と同志が名を上げて、自分の地位を脅かす一大勢力となりかねない。

(まあ、正直、あの男にカリスマ性は皆無ですから、彼に協力しようと名乗りを上げようとする人間はいなさそうですけどねえ)

オーレリア將軍はともかくとして。

しかし、もし頼れるリーダーのような存在が現れてしまったらそうも言っていられなくなる。

そう、たとえばひと昔前、唯一、自分の派閥に属さず、対抗してきたあの男。

チヨウリ大臣のような――。

もし彼が政界に復帰したらどうなるだろうか。おそらく、いや絶対に向こうは彼の政界復帰のために動き出すはずだ。チヨウリ大臣もあの性格だ、いつ自分の意志で政界に復帰しようとするか、わからない。

かつてはチヨウリ大臣には頼りになる味方もおらず、始末する前に、己の危機を察した彼に引退という形で逃げられてしまったが、オーレリア、そしてシヨウイと頼れる仲間がいる今となっては。

(このまま合流されると非常にマズいですねえ……)

たしか北の異民族の制圧に向かわせていたエスデス將軍が、制圧を完了し、こちらに既にこちらに帰還し始めていたはず。

(ようやく制圧完了のところエスデス將軍には申し訳ないですが、チヨウリの始末を頼んどきましようか……)

思いつくや否や、行動は早い。

オネストは帝都に帰還途中であるエスデスの下へ伝令を送った。

そして伝令を送り終えたオネストは骨付きの太もも肉にかぶりつき、一言。

「ああ、イライラしますね……このままではストレスでまた体重が増えてしまいます!」

### 第3話

帝都近郊。寂れた集落を通り過ぎる一組の馬車の姿があった。

「この村もまた酷いな……民あつての国だというのに……」

馬車の窓から愁いを帯びた瞳で生気の抜けた民衆を見やるのは白髭を蓄えた初老の男。かつてこの帝国において大臣の職に就いていた男——チヨウリであった。

「そんな民を憂い、毒蛇の巣である帝都へ戻る父上は立派だと思います」

そんなチヨウリに声を掛けた、彼の隣に座る少女はこのチヨウリの一人娘——スピアであった。槍の名手である彼女は父親であるチヨウリの護衛も務めていた。

「命欲しさに隠居している場合ではないからな。このままでは国が滅ぶ。こうなったらワシはあの大臣オネストととことん戦うぞ！」

一度は隠居を選んだこの身であったが、今の帝国の暴政はこれ以上、黙って見ていられなかった。たとえこの命に代えてもこの国を変えなければならぬと、正義感の強いこの男が自分の村を出発したのはこの一週間ほどのことだった。

「父上の身は私が守ります！」

そう意気込む愛娘の姿を見て、チヨウリは親馬鹿な笑顔を見せる。

「いい娘に育つたのう。……勇ましすぎて、嫁の貰い手がいないのが玉に瑕か……」

「そつ、それは今、関係ないでしょう！」

父親のぼそつと呟かれた後半のセリフをムキになって否定しつつも、凶星だったのかスピアはがっくり項垂れる。

「……別に勇ましいんじゃないですよちよつと槍が使えるだけで私だっという人がいればそれはもうすぐにでも結婚でき……ぶつぶつ……」

「……なんかすまん」

親の言葉に思いのほか心を抉られた娘にチヨウリが謝つたところで、不意にスピアが何かを感じていたのか、俯けていた顔を上げた。同

時に歩みを進めていた馬車も止まる。

「なんだ……う？」

馬車が止まったのは、進む前方に三人の男が立ち塞がっていたからだ。

「また盗賊か!? 治安の乱れにもほどがある！」

改めて帝国の衰退を認識させられ、愕然と声を上げるチョウリを余所に、護衛を務めるスピアの反応は早かった。

「今までと同じように蹴散らす！ 油断するな！」

馬車を飛び出し、周りを護衛していた三十名強の護衛兵たちに指示を出す。

そんなスピアたちを他所に、三人組の中央に立つ、小柄な少年が、無邪気な声を上げる。

「コイツらでいいんだよねえ？ エスデス様の命じられた暗殺対象って？」

その言葉に彼の右隣に立つ、髭を生やした男が頷いた。

「ああ、そうだ」

そんなやり取りを交わす彼らを前にスピアをリーダーとするチョウリの護衛兵たちが、各々の武器を構えた。

「行くぞ!!」

凜々しい掛け声とともに、スピアたちは一斉に三人組に向かい、突進する。

しかしその光景を前に彼らは何の動揺も見せず、髭を生やした男が斧を持った大男に顎をしゃくる。

「ダイダラ」

「おう」

頷いた大男——ダイダラはそのまま携えた大斧を振りかぶり、そして——。

++++

帝国の誇る三大將軍の一人——エスデスには、従える三人の帝具使いがいた。

彼らは三獣士と呼ばれ、エスデスの片腕として恐れられる存在で

あつた。

この度、北の異民族の制圧を完了したエスデスは帝都への帰路の最中に大臣より伝令を授かった。その内容はかつて帝国に仕えていた大臣——チヨウリという男の暗殺。

しかし、エスデスは今、機嫌が悪かった。期待していた『北の勇者』は実際、対峙してみると、吹けば飛ぶようなただの若僧でしかなく、少し民や兵をいたぶり、拷問してやっただけであっけなく壊れてしまった。今まで長らく帝国を苦しめていた北の異民族共も、エスデスの前ではただ蹂躪されるしかなかった。

要は物足りなかったのだ。エスデスは戦いを、闘争を何よりも好む。それが過激であればあるほど尚、良い。

しかし、此度の戦は拍子抜けするほど呆気なく終わってしまった。敗残兵を拷問して幾分か気分は晴れたが、それでも頭の中のモヤモヤは晴れなかった。

そんな中でただの暗殺の依頼を頼まれたところで乗り気など起らない。絶対的な強者との血湧き肉踊る闘争ならともかく、戦闘能力的には一般人と何ら変わらない男の暗殺など、面倒でしかなかった。

しかし、あの大臣の直々の依頼を無視する訳にもいかず、エスデスは先述した三獣士——リヴァ、ニヤウ、ダイダラにチヨウリ暗殺の任務を任せただけだった。

ダイダラの所有する帝具——ベルヴァーク二挺大斧の横薙ぎの一閃で、三十人近くいた護衛兵は呆気なく身体をその鎧ごと叩き斬られて殺された。生き残ったのは槍を犠牲にかろうじて攻撃を回避したスピアのみだった。

「へえ、お姉ちゃん、やるねえ……ダイダラの攻撃で死なないなんて」

膝をつくスピアの前にしゃがみ込み、無邪気な声でそう告げたのは小柄な少年——ニヤウだった。

ニヤウはその懐から鋭い輝きを放つナイフを取り出しながら、天使のような笑顔で笑いかける。

「でもこれから君に起こることを考えると……死んどいたほうがら



くだったかもね」

「ひっ……」

その言葉にこれから自分の身に降りかかるであおる残虐な行為にスピアは息を飲み込む。

(死ぬの……私……死ぬの?)

いい人を見つけて、結婚することもできずに。

大好きな父親を守ることもできずに。

ただこうして、惨たらしく殺されることしかできないのか？

(嫌だ……そんなの嫌だよ……!)

スピアはきつく目を閉じた——その時だった。

「キヤツ!」

何かが地を穿つ轟音が鳴り響く。恐る恐る目を開くと、スピアの眼前には一振りの剣が突き刺さっていた。

まるで満点の星空の光をそのまま凝縮させたかのような剣だ。いや、それは剣という形を取った光そのものなのかもしれない。

とにかく美しい剣だった。そのあまりの美しさに思わず手を伸ばそうとして。その剣はまるで主以外に触れられるのを拒むかのように光の粒子となって消え去っていく。

一方で、光の剣による投擲をかううじて回避したニヤウは、そのまま距離を取り、光の剣が投擲されたその方角を見やる。

やがてゆつくりと、濃霧の向こうから現れたのは、ドレススカート型の戦装束に黄金の鎧を身にまとった一人の騎士の姿だった。鮮やかな金髪に琥珀色の眼差しを無感動なまでに光らせ、ゆつくりと歩を進める。

知っている。無数の光剣をその身に従え、対象を蹂躪するこの帝具を。

そして、その帝具を扱う、一人の帝国の將軍の名を。

しかし、有り得ない。なぜあの人物がこの場所にいる。このような辺境の地に、わざわざ帝国の誇る三大將軍の一人が出向くなど、普通に考えれば有り得ない。

「オーレリア・グラディウス!! お前がなぜここにいる!!!」

そのニヤウの問いかけに、オーレリアはにこやかな笑みで応える。

「おや、善良なる民を襲撃する蛮族を撃ち抜こうとしてみたら、エスデス將軍直属の三獣士の皆さんでしたか。北の異民族の制圧に向いていたはずのあなた方がなぜこのような地に？」

その言葉にニヤウの隣に進み出たリヴァアが言葉を返す。

「それを言うならこちらのセリフです。仮にも国の將軍ともあろうお方がなぜこのような辺境の地にわざわざ足を運んでおられるのですか？」

「なに、ここ最近の帝都の治安の悪さはあなた方もご存じでしょう？ 大切な客人をより安全に、そして確実に迎えるには私自らが出向くことが最善と判断したまでですが？」

そんなことよりとオーレリアは言葉を続ける。

「これは一体どういうことですか？ この者どもは私が帝都に招待したお客人なのですよ？ 何故あなた方は私のお客人を襲撃したのですか？」

リヴァアはギリリと齒を食い縛る。

お客人？ この女は一体、どんなハツタリをかましているというのか。

しかし、言われてしまえば否定することができない。今、この場で彼女の言葉を否定できる材料がないからだ。そしてオーレリアがなぜこのお客人をここまでして守るのか。その目的をリヴァアは悟っていた。

なぜならこの度、エスデスより暗殺を命じられたこのチョウリという男。彼はかつて帝都において政治活動を行っていた大臣の一人で、あのオネスト大臣に唯一対抗し得る男と言われていた。かつては、リヴァアもまた民を第一に考えるその政治手腕を尊敬していたものだ。

だが今のリヴァアにとってはそんな過去の記憶は、もうどうでもよかった。

なぜならリヴァアにとって、誰しもが恐れ焦がれるような絶対的な力で自分を救ってくださった、主たるエスデスの命令は絶対であるからだ。故に、たとえその命令が悪だとしても、エスデスが命じればそれ

は正義なのだ。

しかし、どうしたものかとリヴァアは考える。主の命は絶対——それがリヴァアの絶対の信念である。そして、此度、主より与えられし命は、大臣オネストの権威を脅かしかねない存在であるチョウリという男の始末。

だが、今、眼前に対峙する敵はあのエスデスやブドーに並ぶ三大將軍の内の一人——オーレリア・グラディウス。グラディウス家に代々伝わる帝具を所有し、その実力は帝国随一との呼び声も高い。

そんな彼女を相手に、任務を遂行することができるのか。そう考えてしまつてからリヴァアは、脳裏に過つたその考えを振り払うかのよう  
に首を横に振る。

そう、主の命は絶対なのだ。主はこの男チョウリを始末するよう命じに  
られた。ならば主に忠誠に誓つた我々、三獣士はその命に従わなければ  
ならないのだ。

そして、主の命に邪魔する者は取り除かなければならない。それがたとえ、あのオーレリア・グラディウスだつたとしても。

「忠誠心の強いあなた方のことだ。引き下がれと言つて、引き下がってくれるはずもないですよね」

「ハハッ、無論ですな」

その心を読み取つたかのように告げるオーレリアの言葉に、リヴァアは不敵な笑みを浮かべ、応える。既に隣にはデイダラとニヤウがそれぞれの帝具を手に戦闘態勢に入っている。

考えることは同じか——そんな二人を見て、リヴァアは共に主に忠誠を誓う二人の同志の事を誇りに思った。

「……この男はこれからの帝国に必要な人間なのです。彼を始末する  
というなら、たとえエスデス將軍の配下といえども容赦はしませ  
ん」

その言葉と共にオーレリアの背後に展開されたのは無数の光剣。その数は十——二十——いや、三十を軽く超える。その全ての切っ先がリヴァアたち三人に向けられ、いつでもその命を奪えるよう、空間に装填された。

見る者を圧倒するその神々しき光景にリヴァアは気圧されることな

く、ただ駆け出した。殺すチャンスは一瞬、彼女が光の剣を放つ、その一瞬しかない。

「リヴァさん……かつては誰よりも強く、正しくあろうとした貴方が……残念です」

その眩きと共に、パチンと指が鳴らされ——地を穿つ轟音のみが辺りに鳴り響いた。

十十

「生き残った者は……ワシとスピア……たった二人か……」

「ゴメン、お父さん……私が……ひぐつ……私が弱かったから……」  
自分の力不足を悔やみ、泣きじやくる愛娘を、チョウリはそつと抱きしめる。

自分たちを救ってくれたあの金髪の女性は帝国の將軍で、オーレリア・グラディウスと名乗った。この腐敗した帝国の現状を変えようと、かつてあのオネスト大臣臣に正面から対抗した自分の元へ協力を要請しに来たのだ。

自分たちを襲撃してきた者三獸士と対峙した際、彼女は自分たちのことをお客人と言ったが、そのような事実はどこにもなかった。ただ、あの場で自らの正当性を主張するために告げられた、でまかせだった。

もし彼女が現れなかったら——そう思うとぞつとする。彼女が現れなかったらおそろく——否、絶対に自分たちは全滅していただろうからだ。

この世界で誰よりも大切な愛娘が無事でよかった。そう思うのと同時にチョウリはこれが今の帝国の現実なのだということを知る。

(大臣オネストの邪魔になる者は容赦なく潰される……これが今の帝国か……)

自分の為に護衛を買って出てくれた三十名の同志の亡骸は、遺体の腐敗による伝染病を防ぐために一ヶ所に集めて燃やし、そして大穴に纏めて埋めた。本当なら一人一人、しっかりと供養してやりたかったが、今は一刻を争う。こうしている間にも帝国の衰退は進み、民は苦しんでいるのだ。

亡骸を埋め、木で作った十字架を立てた簡易の墓。その前でチョウ

りは誓う。

「こんな老いぼれの為に命を賭して戦い抜いてくれて、感謝する。ワシは必ずこの帝国を変えてみせる。残された自分の人生全てを賭けてな。」

この国のために戦い抜くこと、それが戦いで散っていたお前たちに対する最大にして最高の供養になると、ワシは信じとる」

——だから、安心して、眠っててくれ——。

娘の手を取り、チョウリは歩き出した。オーレリアもその後が続く。

(間に合ってよかった……しかしこうも早く手を打ってくるとは、あのデブも手段を選びませんね……)

現れたのがエスデスでなくて良かった。氷を操るあの最強の將軍を相手に勝ちきれたか。負ける気は毛頭ないが、それでも決して断言することはできない。

(……三獣士の死はすぐに伝わるでしょう。彼らが持っていた帝具は回収しましたが、オネストあのデブに徴収されないよう、注意を払わなければ……)

しかし、それにしてもオーレリアは思う。自分をもっと早く気づいていれば、間に合っていたら、ここまで犠牲者が増えずに済んだのではないのか、と。

過ぎ去ってしまったことだ。今更考えた所で無意味だということにはわかっている。

しかし、それでも彼女は、そう考えずにはいられないのだ。

リヴァ、ニヤウ、ダイダラ、死亡。帝具はオーレリアが回収済み。

三獣士——全滅。元・大臣チョウリ、娘スピア、生存。

## 第4話

「リヴァア……ニャウ……ダイダラ……たかだか元大臣の暗殺任務で……なんというザマだ……」

まだ真新しい三つの墓の前でエスデスは一人呟く。

「死んだ、ということはお前たちは弱かったということ。弱い者は淘汰されて当然……仕方のない部下どもめ」

帝都に帰還したエスデスを出迎えたのは、任務を完遂した三自分の部下獣士の報告ではなく、既に埋葬の終えられた三人の墓だった。

誰に殺られたのか。その情報はまだエスデスの元には届いていない。ただ一つ、言えるのは彼らは三三獣士獣士率いる軍の主軸を担っていて。彼らを倒したその何者かは、帝具使いでもある彼ら三人を相手にして勝利を収められるほどの実力の持ち主だということだ。

(噂に聞くナイトレイドはたまた別の誰かか……)

墓の前に花束を置いたエスデスは静かに立ち上がる。自分の至らぬ所で勝手に殺された挙句、帝具まで回収されるとは、本当に……仕方のない部下だ。

「仕方がない……だから私が仇を取ってやろう」

それは静かなながらも力強い意志の込められた言葉だった。

エスデスは身を翻す。散っていった部下どもの墓を訪れるのは今日が最初で最後だ。もう二度と、この場所を訪れることはあるまい。

これ以上の弔いの言葉は敗者には不要であり。散っていった彼らもまた、これ以上の言葉を望まないだろう。

(だから私に遠慮せず、永久とわの眠りにつくがいい)

それがエスデスなりの……忠義を果たした配下に対する答えだった。

十十

かつて政界においてオネストと唯一、渡り合った男——チョウリ。

そんな彼の政界復帰は、帝都に大きな波紋を投げかけた。

ショウイによって僅かながらに、けれども確実に改善されてきた政策に対し、喜びというよりは疑念と戸惑いを抱いていた民衆も、かつ

ての帝国きつての良識派の大臣の復帰に希望を見出し、宮殿内でも彼の復帰に今まで報復を恐れ身を潜めていた反オネスト派の政治家たちが一人、また一人と名乗りを上げ始めたのだ。

それほどまでにこの度政界に復帰したチョウリという男の存在は大きかった。

まだその勢力はオネストの権威を脅かす程のモノではない。それでも自分に楯突く対抗勢力を誕生させてしまったという事実は変わらない。

(完全に誤算でした……まさか、エスデス將軍がチョウリ暗殺の任務をしくじるとは……)

濃い目に味付けされた肉を噛み千切りながらオネストは、ギリギリと拳を握りしめる。

オーレリア・グラディウスが帝都に向かうチョウリ護衛の為に、直々に出向いたことは、チョウリがこの帝都に辿り着いた際、彼女が共にいた現場を目撃されている事からも、もはや明らかだった。

(オーレリア將軍が自ら出向くとは……彼女の行動力を侮っていました……)

皇帝に余計なことを吹き込んだその時点で、彼女の行動力の高さには気づいておくべきだったのだ。それは完全に自分のミスだ。

せめてエスデス自ら出向いていれば、結果は違ったのかもしれない。  
　　<sup>オー</sup>国で最強と称される將軍　　を　　倒　　す　　に　　は、

同じく<sup>エ</sup>国で最強と称される將軍でないと、話にならないからだ。帝具使いを倒せるのは同じく帝具使いだけ、とよく言われるが、ただの帝具使いではブドーを始めとする帝国の三大將軍を倒すことは不可能だ。

しかしだからと言って、今回、自ら出向かなかったエスデスを責めるのはお門違いであるということをおネストは理解していた。

なぜなら普通に考えればたかが元・大臣の暗殺任務なのだ。故に普通に考えれば將軍であるエスデスが自ら出向くような任務ではないし、同じく將軍であるオーレリアもまた然り……なはずだった。そういった点では自らの忠臣である三獣士を動かしたエスデスは、やる気

の乗らないなりに最大限の考慮をしてくれたと言える。……考慮をしてくれたといえるのだが……。

（しかし結果として三獣士は殺され、彼らが所有していた帝具もまた回収された……帝具を回収したのはオーレリア將軍でしょうが……渡せと言って素直に応じるとは思えませんしねえ……）

食卓に並べられた豪勢な食事を貪りながら、オネストはさらに考える。

（あくまで一介の内政官でしかないショウイと違って改革派の中心的存在であるチョウリ大臣は一刻も早く始末しなければなりません。彼の存在は改革派の中でもかなり大きい。逆に言えばかれさえ始末できれば再びその勢いを削ぐことができるはずです……）

しかし言わずもがな、チョウリ大臣にはオーレリアの護衛がついている。というより、対抗勢力——帝国改革派の人間にはもれなくオーレリアの護衛がついている。始末するのは容易なことではない。

エスデスをオーレリアにぶつけるか？——いや、ダメだ。今、帝国内部で揉め事を起こせば、それこそ革命軍や西や南の異民族に付け入る絶好の機会チャンスを与えてしまう。たださえストレスが溜まっているというのに、これ以上、面倒事を増やしたら、ストレスのあまり、さらに食事の量がふえてしまうかもしれない。

「随分と苛立っているようだな」  
そんなオネストの下に、いましたが考えていた張本人——エスデスの姿が現れる。

「これはエスデス將軍。北の制圧、ご苦勞様でした。陛下への謁見はもうお済みになられたのですか？」

「ああ。褒美として受け取った黄金一万は既に北に残してきた兵たちを送ってある」

「相変わらず部下にはとことん優しいのですな」

「心服すればするほど兵は命惜しまず戦うようになる。——私の部隊が最強の部隊が最強の攻撃力を持つといわれている理由の一つだ」

エスデスはオネストの向かい側の席に座ると、ワインを注ぎ、グラスを揺らしながらつまらなそうに口を開く。



「それはそうと私がない間に帝都は随分と変わったようだな」  
「と申されますと？」

「なんとすべきか……ヌルくなった。このワインのように」  
その言葉にオネストは「わかりますか？」と困ったように告げる。

「実は最近、私に楯突く対抗勢力が現れましてなあ。あの男——  
チヨウリが加わった今となってはほとほと困っているのですよ」

「ああ、その件に関しては申し訳ない事をしたな。まさか三獣士を  
退けるとは、私も想定外だった。我が軍からしてみても予想外の損失  
を被ってしまったことになるな」

「言ってしまうえば帝具使い三人の損失ですからねえ……人員の補充  
は必要ですか？」

「ソレについては元々、頼むつもりではいたが……そんなことより  
だ」

——知っているんだらう？

エスデスは冷たく微笑みながら、オネストに問いかける。

「知っている……とはどういうことですか？」

「私の部下を殺した者の事だ。仮にも帝具を保有するあの三人を倒  
したのだから、それなりの強者である事は間違いないだろう。あいつ  
らを倒したのは噂に聞くナイトレイドか？」

「……」

オネストの頬を冷や汗が伝っていく。

この流れはマズイ。もし真実を話せばこの女のことだ、国の現状な  
どお構いなしにあの者に戦いを挑む可能性がある。

そしてオネストの考えとしては現段階でソレは避けたい。先にも  
行ったが、この状況での内輪揉めは、革命軍や異民族などの外部から  
の脅威に付け入る隙を与えてしまうことになる。

そしてさらにエスデスがオーレリアに勝利を収めるならまだいい。  
敵味方問わず、帝国の戦力的に、総合的な損失が一番大きいのは両者  
共に相打ちという結果だが、それにしても改革派における守りの要で  
あるオーレリアを始末できるならそれも良しとしよう。

オネストにとって最悪なのは、万が一、オーレリアが勝ってしまう

た場合だ。もしオーレリアがエスデスに勝つようなことがあれば、今度はおネストを守る武力的な後ろ盾が完全に無くなってしまふ。

無論、エスデスが最強であることは百も承知している。総合的に見ても、エスデスとオーレリアどちらが上かと問われれば、帝具の相性もあるが、僅かにエスデスに軍配が上がるだろう。

しかしそれも確実ではない。それほどまでに両者の実力は拮抗しているのだ。

おネストとしてはどちらに転ぶかわからないそんな危険なギャンブルを今、ここで行うのは避けたかった。

「知って、どうするつもりですか？」

「なに、あいつら<sup>三</sup>獣士<sup>六</sup>を倒すほどの実力者であるなら、少なくとも『北の勇者』よりは私の退屈も癒してくれるのではないかと思つてな。知つたからと言つて、深い意味はない」

「……」

いや、違う。彼女の考えていることはそんな生温いものではないことは、これまでの付き合いで嫌でもわかつてしまふ。

たしかにこのエスデスと呼ばれる人物は超がついてもなお足りないほどの生粋のサディストで、生温い平和よりも血みどろの闘争を何よりも好んでいる。エスデスが自分に対し、力を貸してくれるのも、自分が一番、彼女の望む環境を生み出すことに適しているからだ。

つまりエスデスとおネストの関係はまさにギブアンドテイクで成り立っている訳だが、しかしだからと言って彼女が血も涙もない冷酷無比な者かと問われれば、一概にそうとも言い切れない。

エスデスは敵に対しては一切の容赦がない。降伏した兵を惨たらしく拷問して殺す、極悪非道を地で行くような女だ。

しかし意外なことにも優秀な部下に対しては寛大で、優秀でさえあるならば、彼女は身分の優劣など関係なしに最大限の敬意と礼儀を以て接する。そんな自分の認めた部下が殺されるような事があれば仇を取るために動く。それがエスデスという女だ。

どうするか。おネストは考える。エスデスとオーレリアの衝突を防ぐなら、三獣士を倒したのがオーレリアであるという事実を、まず

隠さなければならぬ。

しかしだからと言って、今ここで何も言わないのは不自然だ。まだ犯人は捜索中ということにするか？ いや、それで彼女自身に動かれただらさらに面倒なことになりかねない。

と、そこまで考えたところでオネストの脳裏の妙案が思い浮かぶ。(そうです。エスデス將軍の言う通り、ナイトレイドが殺したと仕立てあげてしまえばいいのです！)

帝都において自分の部下を悉く始末していく、革命軍の抱える暗殺者集団ナイトレイドには随分前から煩わしいと思っていた。

ここで犯人をナイトレイドに仕立て上げれば、エスデスの矛先はナイトレイドに向く。エスデスとオーレリアの正面衝突は避けられ、煩わしいナイトレイドは一網打尽にできる。まさに一石二鳥だ。

(そうだ。これを機に念には念を入れてオーレリア將軍には西の制圧に向かわせましょう。そうすれば戦力的に彼女も改革派につけている護衛を引き離させざるをえないはず。彼女の出払っている間に改革派の連中を始末してしまえば、改革派の勢いも削げて一石三鳥……いえ、うつとおしい西の異民族も制圧できて一石四鳥です！) そんな大臣オネストの一連の提案を聞いたエスデスはふっ、と笑みを浮かべ。

「嘘はつくなよ、大臣」

次の瞬間、オネストの首下には氷で造り出された短剣の、その鋭い切っ先が突きつけられていた。

「う、嘘とは……？」

「私の部下を殺したのはナイトレイドではないだろう？ 私の部下を殺したのはナイトレイドではない別の何者かだ」

「なぜそのようなことを？」

オネストの問いかけにエスデスは答える。

「私は始め、訊いたな？ 部下を殺したのはナイトレイドかと」

「え、ええ……」

「その後、お前はこう言った。知って、どうするつもりなのかと」  
「……」

「なぜ、私の問いにワンクッション、間を開けた？」

ナイトレイドの仕業  
私の言う通りな

ら、わざわざ知ってどうするのか確認することでもないはずだ。お前にとつて、ナイトレイドは邪魔な存在で、今の私の問い掛けは私にやつらを始末するよう頼めるまたとない機会チャンスな訳だからな。——少なくとも私の知るオネスト大臣であるならば、間髪いれずに私の問いを肯定し、ナイトレイドを始末するよう頼んだはずだ」

その言葉にオネストは苦笑いすることしかできなかった。長年付き合っていたら、相手の考えていることもわかってくるようなことを言ったが、それはエスデスにも言えることだったのだ。

（しかし、そんな私の一言で嘘を見抜いてしまうとは、流石は帝国最強の將軍エスデス將軍といったところでしょうか）

ここまで来たらもう腹を括るしかない。やれやれとため息を吐き、オネストは観念して口を開いた。

「やはりエスデス將軍は騙せませんか。……仕方がない、正直に答えますよ」

「そうしてくれた方が身のためだ。私は嘘をつかれるのが一番嫌いなんだ」

心臓を鷲掴みにされるような眼光に、さすがのオネストもぶるつ、と身震いしてからエスデスに答える。

「この度、帝国改革派のリーダーとして名乗りをあげたチヨウリという男……かつて私と敵対していた元・大臣の男ですが、彼がこの帝都に到着した際、彼の隣に一人の將軍の姿が目撃されているのです」

「ほう……それで、その將軍の名は？」

「我が国が誇る三大將軍の一人——オーレリア・グラデイウス。帝国改革派の人間を次々と自分の庇護下に置き、活動を促している彼女の姿が目撃されていたのです」

そこまで説明すれば、このエスデスに理解できないはずもなかった。

「そうか……あのオーレリア・グラデイウスが……」

ぞくり、と寒気がするほど鋭利な笑みを浮かべるエスデス。その眼差しは部下を殺した復讐相手を見つけたことに対する悦びというよ

りも、まるで自分を楽しませてくれる宿敵を見つけたかのような感動という悦びに満ち溢れていた。

オーレリア・グラディウス。三獣士を打ち倒したのが彼女であるというのなら文句はない。なぜなら彼女はエスデスが認めた数少ない絶対的な実力を持つ強者の内の一人だからだ。

初めてだったかもしれない。勝てるかどうか、わからない、と直感が囁いたのは。それほどまでの圧倒的な覇気をエスデスは初めて対峙した時の彼女から感じたのだ。

しかし——いや、だからなのか、その実力を認める一方でエスデスは前々から彼女のことを気に食わなかった。なぜ彼女は弱者のため、に剣を振るうのか。自分と同じ絶対的強者であるのなら弱者を蹂躪し、己自身の欲望に忠実に生きるべきだというのに。

なぜ己を律する？

本当のお前はそんなものではないだろう？

初めて出会った時からエスデスは、ずっとそう思っていた。

「おもしろい……」

ならば私が教えてやろう。力を持つ者の立ち振る舞い方と言うものを。

蹂躪される苦しみを。

蹂躪する悦びを——。

自分と同じ絶対的強者を自分の色に調教するのもまた一興だ。

「……あのー、意気込んでいる所、申し訳ないのですが、オーレリア將軍との決着は後々、ということにしていただけませんかねえ……」

「……」

空気を読まないオネストの発言にエスデスはじろり、と彼を睨み付ける。エスデスに睨まれたオネストは、慌てたように追加説明を加える。

「ほ、ほら、今、この帝国の周りには敵だらけじゃないですか！　今、あなたとオーレリア將軍に衝突されたら、奴らに付け入る隙を与えてしまうことになりかねないですよ！」

その言葉に興が削がれたと言ったように、肩の力が抜けたエスデス

が、静かにオネストの意中を読み解く。

「つまり、オーレリアとの決着は外部の敵を全て潰してからにしろ……ということか？」

オネストは頷く。

「ひとまず厄介者であるオーレリア將軍は西の異民族の制圧に向かわせます。その間に宮殿に蔓延る改革派の連中どもを始末し、脅かされつつある私の権威を取り戻します。

あなたには帝都近辺に蔓延る賊の鎮圧、延いては帝都の影で暗躍するナイトレイドの殲滅をお願いしたいのですが……」

「……オーレリアとの戦いを外部の敵に邪魔されるのも癪だ。いいだろう、お前の口車に乗ってやろう」

——ナイトレイドの面々にも多少は興味があつたことだしな。

そう言い残すと席を立ち上がり、その場を後にする。

エスデスに嘘を見破られた時は一瞬、どうなるかと思つたが、結果的にうまくいってよかった。

(帝国改革派の勢いも、ここまでです)

エスデスが立ち去った後、一人、残されたオネストは、乱暴に肉を噛み千切り、歪んだ笑みを浮かべたのだった。

「——そうだ、大臣。ナイトレイドの殲滅の件だが、奴らは帝具使いが多いと聞く。帝具には帝具が有効だということはお前もわかつているだろう。……という訳で、損失した人員補充も兼ねて帝具使いを六人集めておいてくれ」

ひよい、と思ひ出したかのように顔を出したエスデスがオネストに向かい、それだけ告げると再び、その場を後にしていく。

「て、帝具使い六人で……その要求はDS過ぎますぞ、エスデス將軍ー!!」

宮殿内にオネストの悲痛な叫び声が響き渡つたのだった。

## 第5話

かつて暴政を振るう大臣オネストと唯一、渡り合った良識派の大臣  
チヨウリの政界復帰は帝都にて息を潜めていた反オネスト派の者た  
ちに大きな希望を投げかけた。

これまでオネストの邪魔者を排除する操り人形に過ぎなかった幼  
き皇帝は、オーレリアやチヨウリを始めとする改革派の者達の助言の  
下、改革派の行動を邪魔建てしようとするオネストの動きを公の場  
における立場関係を利用して抑えた。

これにより改革派の内政官達は以前のように政策に口を出し処刑  
されるといふことが無くなり、チヨウリを始めとする改革派の人間は  
オネストが差し向ける裏の刺客による襲撃のみに気を払えばよいこ  
ととなった。

そしてその裏の刺客による襲撃から改革派の政務官達を護衛する  
役目を承ったのがオーレリア・グラデイウスが率いる精鋭の騎士達。  
彼らはオーレリアの指示の下、二十四時間体制で改革派の政務官の護  
衛に就き、オネストが差し向ける裏の刺客達から改革派の政務官を守  
り抜いていた。

幼き皇帝と彼を支えるチヨウリを始めとする政務官。そして彼ら  
を外敵から護るオーレリアを始めとする騎士達。

帝国の魂と頭脳、そして剣による絶妙なコンビネーションにより、  
必要以上に重い税の減税、帝都に溢れ返る失業者のために道路整備な  
どの公共事業の展開。それによる雇用の増加など帝都の政治は僅か  
ずつではあるが、確実に、着実に、改善されていた。

幼き皇帝は積極的に街に繰り出した。同じ過ちを犯さぬよう、今度  
は自分の耳で直接、民の声に耳を傾けるために。

自分の目で、真実を見るために――。

「ではオーレリア將軍には帝国西端の国境付近を侵攻している西の  
異民族の制圧をお願いする……ということではよろしいですか？」

帝都宮殿、会議の間にてオネストが告げたその言葉に、玉座に腰掛  
け、文官同士による会議の様子を見守っていた皇帝は目を見開いた。

「なっ!？」

思わず身を乗り出す皇帝。オネストのこの言葉の意味が理解できない皇帝ではなかったのだ。

どうにかせねば——。しかし皇帝が口を開くその前に、オネストがさせないと言わんばかりに重ねて口を開く。

「陛下、エスデス將軍は先の北の制圧任務で消耗しております。城の防衛をブドー將軍が務めることとなると……西の制圧にはオーレリア將軍が出向くべきかと存じあげますが……」

——何か不都合な事がございますかな？

オネストのその言葉に、幼い皇帝は返す言葉を見つけれなかった。

(ふふふ……所詮は陛下も子供。少し圧をかければ言葉を失ってしまふ未熟者です。オーレリア將軍が改革派の連中に付けている護衛は彼女たちが勝手にやっている事——つまり国の命令に従った公の任務ではない。つまり公には彼女は現在、何の任務にもついていない暇人ということになる。そんな状況での国の命に則った制圧任務——断れる理由がありませんよねえ……)

内心、ほくそ笑むオネストを前に立ち上がった男の姿があった。——先日、オーレリアに命を救われ、無事に政界に復帰した大臣のチョウリである。

「オネスト大臣」

「なんですか、チョウリ大臣」

「大臣はここ最近の帝都の治安の悪さをご存じですか。——実は私を始めとする何人かの政務官が闇夜に紛れて何者かに襲撃されるという事件が起きているということを」

「おやおや、そのような事件が起きていたとは……初耳ですねえ……」

オネストのわざとらしいその言葉にどの口がそれを言うかと言わんばかりにチョウリは一瞬眉をひそめるが、怒りを鎮めるように息を一つ吐き出すと、再度口を開く。

「幸いにも事前に察していたオーレリア將軍が就けてくださった護



衛のおかげで今のところは犠牲者は出てはおりませんが、將軍の機転がなければどうなっていたか……」

「それで、チョウリ大臣は何がいいたいのですかな？」

正面から自分を睨み見据えるチョウリをオネストはにたりとした笑みを浮かべたまま受け止める。

「……現状、オーレリア將軍に西の制圧に赴かせる余裕は無いという事です。少なくとも夜道も安心して歩けるような治安になるまではオーレリア將軍には帝都を中心とした治安維持に務めていた方がいいと存じあげます。……西の制圧には他の將軍を向かわせればいい」

「なるほど、言いたいことはよくわかりました。しかし西の異民族にはここ近年随分とてこずっておりましてな……並大抵の実力の將軍ではジリ貧になってしまうのも時間の問題なのですよ」

それからしばらく思考を凝らす素振りを見せた後、ではこうしましょうとニヤリと笑みを浮かべて口を開いた。

「国としてはこれ以上の西の被害を被る訳にもいかない。しかし帝都の治安維持も必要不可欠……それならばエスデス將軍にこの帝都の治安維持に務めさせ、気力の充実しているであろうオーレリア將軍にはやはり西の制圧に向かってもらおうというのは」

「むう……」

確かにこれ以上、西の被害を被る訳にもいかない。悔しいことにオネストの言っている言葉も一理ある。西を侵攻してくる異民族が帝国の民を苦しめているのもまた事実だ。

そして並みの將軍では西の異民族に苦戦するということのもまた、事実だ――。

（だがエスデス將軍はオネスト大臣側の人間。彼女に治安維持を任せるということは即ち、自分たちを丸裸にしてしまうことと同じこと……）

民があつての国なのだ。西の民を見殺しにする訳にもいかない。だがこの帝国を変えるためにも、自分たちが今ここで死ぬ――殺されるわけにもいかない。

どうすればいい。

どうすれば――。

「……しかしエスデス將軍は北の制圧を終えたばかり。消耗しているといったのはオネスト大臣ではありませんか。そのエスデス將軍に新たに帝都治安維持の任務を与えるのは……」

苦し紛れに口を開くチョウリにダメ押しと言わんばかりにオネストが声を上げる。

「チョウリ大臣が仰っていたことが本当ならこの帝都の治安は最悪なものなのでしょう。そしてその被害を抑えていたのがオーレリア將軍……」

エスデス將軍がオーレリア將軍、ブドー大將軍に並ぶ帝国の三大將軍であることはチョウリ大臣も知つての通りでしょう。任務といつても制圧任務よりは遥かに軽い……楽な任務であることは明白です。この帝国の事を思えばエスデス將軍も喜んで承諾してくれることでしょう。

そしてオーレリア將軍の後釜にエスデス將軍ほど相応しい人物もいない。……そうは思いませんか、チョウリ大臣？」

ニタア、と悪魔のような笑みを浮かべてワザとらしくエスデスはチョウリに問いかける。

「……」

もつとも、実際にあのエスデス將軍が消耗しているかと問われれば、戦いに快楽を求め、戦乱を何より愛するあの女のことだ……仮にもしこの状況で西の制圧を命じられたとしても断るといふことはない――むしろ喜々として引き受けることであろう。

だがオネストにとって自分を含めた帝国改革派の者たちは邪魔な存在であり。邪魔な存在を片づけるためには自分たちを守護しているオーレリアを帝都の外に追いやらなければならない。

そして西の制圧も視野に入れなければならないこの状況下において、オーレリアを西に向かわせ、エスデスを代わりに帝都に置くというオネストのこの言葉は……悔しいことに表向きの話としては筋は通っている。

オネストが自分たちという邪魔者を排除しようという明確な証拠がない今、オネストのこの言葉を否定することはできない。むしろ変に食って掛かって、自分たちの立場を悪くしてしまう訳にもいれない。まだこの帝国の政界における最大勢力はオネストの派閥であり、まだ自分たちにはその勢力と真つ向から対抗できるほどの力がある訳ではないのだから。

「ぐっ……」

皇帝の助太刀をすべく立ち上がったチョウリも言葉を失った。そんなチョウリを始めとする帝国改革派の者達を前に、オネストは満足気にニヤリと笑った。

「ではオーレリア將軍は準備が整い次第、西の国境付近を荒らす異民族共の制圧を。チョウリ大臣が仰っていた文官を狙った賊共への対応はエスデス將軍に任せる……ということでは皆さんよろしいですね？」

十十十

「どうする……どうすればいい！ このままではオーレリア將軍は帝都から離れなければならなくなるぞ！」

議事が終わり、無人となった会議の間にて、ついに不安を隠しきれなくなつたのか、皇帝が切羽詰まつたかのように声を荒らげた。

「申し訳ありません、陛下……力及ばず……」

そんな皇帝にチョウリは深々と頭を下げる。

せめてここ数日の間に襲撃してきた刺客の裏を取れていれば、話は違つたのかもしれない。

オーレリアの就けた護衛のおかげで犠牲者は出なかつたものの、襲撃者の素性——即ちその雇い主を割ることができなかつたのだ。

無論、その雇い主がオネストであることは百も承知だ。だが証拠がなければただの空言でしかない。証拠さえ掴めていれば、その証拠を下にオネストを責め上げる口実を作れたものの、そのところはやはりオネスト……一筋縄にはいかなかった。

その時、口を開いたのは議会が終わるや否や、皇帝の元へ駆けつけた將軍——オーレリアだった。

「陛下、私が西へ向かうことはもう決まっていますし、変えることはもう叶わないでしょう。……変えることのできない過去を考えるなら、今、これから先の未来、変えられることを考えるべきだと思います」

その言葉に皇帝ははつと目を見開き、そして気づく。

そうだ。今、ここで自分が取り乱して何になる。民の上に立つ者として、どんな状況でも毅然としていなければ。

「……皆、すまない。国の上に立つ余がこんな様では立つ瀬がないよな」

自虐的な笑みを浮かべた皇帝のその言葉を、オーレリア即座に否定する。

「そのようなことはありません、陛下。チヨウリ殿から聞かされましたが、オネスト大臣が私に西への制圧任務を提案された時、すぐにその言葉の意味が成すことを把握し、どうかしようと思つ先口をお開きになろうとしてくださいましたそうではありませんか」

「だが結局、余は大臣オネストの圧力に言葉を失ってしまった……余が未熟なばかりに」

——大臣の言葉に返す言葉が見つけれなかった。

そう告げた皇帝をオーレリアはただただ慈しみを込めた眼差しで見つめる。

ついこの間までは大臣あのデラの操り人形にしか過ぎなかった皇帝が自分の頭で考え、行動している。それがどれだけ素晴らしい出来事なのか、理解できないオーレリアではなかった。

（ああ……それにしても憂い顔の陛下も中々にそそられる。本当に可愛らしい、愛おしい）

しかし、それでも陛下には常にあの民を照らす太陽のような笑顔でいてくださるのが一番だ。

オーレリアは幼い皇帝に視線を合わせるようにその場に膝をつくと、そつとその華奢な身体を抱きしめ、耳元で優しく囁く。

「……そのようなこと、陛下が気に病む必要はないのです。陛下は自分の足で……意志で歩みを始めたばかり。未熟であることなんて、

当然のことなのです」

私だつてそうでした、とオーレリアは皇帝の肩を優しく掴み、微笑みかける。

「……將軍も、未熟だったのか？」

まじまじと自分を見やる皇帝に、オーレリアは頷く。

「ええ。私がグラディウス家の跡を継ぐため、そしてこの国の為に剣を取ると決めた時……私は戦いの「た」の字も知らない、これ以上無いくらいの未熟者でした」

若くして帝国三大將軍の一人にまで昇り詰めた天才である彼女が。千の軍勢をたつた一人で斬り伏せる最強の將軍が。

信じられないと言ったように目を見開く皇帝にオーレリアは少しだけ苦笑気味の笑顔を見せ、「しかし」と言葉を続ける。

「しかし未熟者ではあつた私ですが、それでも努力だけは怠つたことはありませんでした」

日の出と共に剣を握り、日が地平線の向こうにまで沈むまで剣を振るい続けた。

日が沈んだ後には蠟燭の灯りを頼りに戦闘学を始め、政治、経済、建築、薬学……どのような状況、立場においても素早く、そして確実に対応するためにあらゆる座学を貪るように学んだ。

「……陛下が私の事を特別だと、そう思いになられているのだとすればそれは誤解なのです。人は誰も始めは未熟……しかし努力次第で人はどこまでも強くなれる。」

故に未熟は罪ではない……。必要なのは目的を成し遂げようとする強い『意志』と『覚悟』。ただ、それだけなのです」

「強い意志と……覚悟……」

オーレリアの言葉が皇帝の頭の中で反響する。

未熟なことは罪ではない。彼女はそう告げた。では罪な行為とは一体何なのか。

（決まっている！ 努力を怠ること。鍛錬を放棄すること。未熟な己を許し、現状に甘えること……それが罪なのだ！）

だが、自分を厳しく躰けるといふことは思いのほか難しい。誰も

が辛い過酷な鍛錬には根を上げ、地道な修練には飽きが生じ、気が緩むこともあるだろう。

だからこそ強い意志と覚悟が必要なのだ。

一度決めたことを最後までやり遂げる強い意志。その過程でどんなに辛い試練が立ち塞がったとしてもそれを乗り越える覚悟。

自分にその意志と覚悟があるかと問われれば——その答えは言われるまでもない。

(この国のために……民のために戦う。最後まで戦い抜く。それが皇帝である余の務めであり、責任！ 何がなんでも成し遂げて見せる！)

たしかに先の会議では自分の未熟さ故にオネストに先手を打たれ、成すすべなくオーレリア將軍の西方派遣が決まってしまった。

だが嘆いている暇はない。嘆く暇があるならそれを糧にしてさらに前へと突き進め。

失敗に挫け、努力を怠り、未熟な己自身を許してしまつたら——その時点で自分の成長は止まってしまう。

だが、未熟であつても己を戒め、前に進むことを止めなければ——人は未熟であつても構わない。その事を、目の前の將軍は自分に教えてくれたのだから。

オネストに先手を打たれ、狼狽え、挫けそうになつてしまつた自分を優しく、心強く励ましてくれたのだから——。

「……ありがとう、オーレリア將軍。お前のおかげで余は救われた」  
せめてもの感謝を伝えようと、皇帝は先ほどオーレリアにしてもらつたように、その小さな身体で彼女の女性としての柔らかさを残しながらも日々の鍛錬で引き締められた身体をぎゅっと抱きしめ返す。

「っ……!?!」

瞬間、ビクツと身体を硬直させるオーレリア。

「へ、陛下……?」

普段の彼女からは想像もつかないようなしどろもどろなその口調に皇帝の頭にはただ？マークが浮かび上がる。

「いや、ただ感謝の想いを言葉だけでは伝えきれぬから、身体でも表

現しようと思っただが……もしかして嫌だったか?」

「いえ、そのようなことは断じてございません!」

瞬間、悲しそうに目を伏せた皇帝の言葉をオーレリアは半ば食い気味に否定する。

オーレリア自身からのスキンシップは今までも何度かあった。現に先日、陛下に帝都の案内をした時も、もし迷子になったら大変だからと何かと理由をつけて手を繋いだり、今もこうして陛下を励ますために抱き締めたりもした。

そんなオーレリアがなぜ、陛下からの抱擁に身体を硬直させたかといえ……ひとえに陛下からのスキンシップには免疫がなかったということ。

今まで自分からすることはあってもされたことがなかったオーレリアは、自身が受け身というこの状況下で、陛下のスキンシップに対し、どのように行動すればいいのか本当に分からなくなってしまっていたのだ。

しかし敬愛する主からの抱擁が嬉しくないはずもなく。

(陛下が自分から……まさか自分から抱きしめてくださるなんて……えへ、えへへ……ああ、このままその髪に顔を埋めて思い切り深呼吸したい……ダメダメいくらなんでも超えてはならない一線というものがあってですね……)

オーレリアの内面は決して他の者には見せられないくらいには緩み切っていた。現にその頬は懸命に緩んでしまうのを抑えるかのようピクピクと引き攣っている。

「嬉しいです……とても」  
しばらくして。

胸の高揚を抑えるべく、まさに絞り出されたオーレリアのその言葉には幾重もの何とも形容しがたい葛藤が込められていた。

「そうか……それならよかった!」

しかし幸いにもオーレリアの内面の葛藤には一切気づかなかったのか、天使のような笑顔で嬉しそうに笑ってみせた皇帝は最後に一際強く、オーレリアを抱き締めるとようやくその身体を離す。

「……」

名残惜し気に皇帝を見つめるオーレリアの姿に気づいたのはその様子を見守っていた帝国改革派の大人達のみだった。

＋＋＋

「しかし実際のところどういたしますかな。このままでは我々の護りの要であるオーレリア殿は西に。オネスト大臣の息がかかった者がここぞとばかりに襲ってきますぞ」

「うむ。どうにかオーレリア殿の代わりに我々の味方となつてくれる將軍を見つけないところではあるが……」

それから間もなくして。

告げられたショウイの言葉にチョウリは頷いた。

「ブドー殿なら心強いことこの上ないのじゃが……じゃがあの男は……」

——よくも悪くも堅物だ。

エスデス、そしてオーレリアに並ぶ大將軍ブドー。オーレリアと同じように將軍の家系に生まれ、その実力はまさに折り紙付きだ。

だが『武官は政治に口を出すべからず』という代々の教えを忠実に守り、かつて自分が帝都にてオネストと真つ向に対立し、政治を行っていた時も……手を貸してはくれなかった。

先軍政治、軍事政権、軍国主義——それは戦争を外交の主たる手段と考え、軍事力の増強を優先とする考え方だが、それは結局は民に苦難を強いり、国の衰退を招く。

武官が政治に口を出すとその確率が高まるが故のその教えなのだろう。普通であるならば教えを守るブドーの行動は正しい。正しいのだがそれはあくまでも国の情勢が普通であればの話である。

そして今、国の情勢は普通ではない。

だからこそブドーの力が必要なのだ。

(どうにかするしかあるまい……どうにかしてブドー殿の協力を得なければ……)

間もなくして自分たちの守りの要であったオーレリア將軍は西の遠征に護衛に就けていた騎士団を連れて帝都を離れてしまう。



オネスト大臣に肩入れするエスデス将軍が帝都に残るとなつては、いつ自分たちが殺されてもおかしく状況に陥りつつある。

そんな状況を打破するには、エスデス将軍に並ぶ実力を持つブドー大將軍に協力してもらい、オーレリア将軍不在の間を乗り越える他に方法はないのだ。

「……とりあえずブドー殿には私から話をしてみましょう」

そう告げたのは、普段の凛々しい表情に戻ったオーレリアだった。

「……説得できるのですか？」

「確証はありませんが、考えはあります」

オーレリアは宙を仰ぐ。

「代々將軍の家系に生まれた者同士です。年齢や考え方は違えど帝国の繁栄を願う気持ちは……帝国の為に剣を振るうと誓った忠誠は……変わらないはずですよ」

その言葉に帝国改革派に属する政務官の一人が、思わず口にしてしまった不安。

「だがもしダメだったら？ もしブドー大將軍が我々に協力してくださらなかったとしたら？」

まさに思わず漏れ出てしまったというべきその言葉に、部屋には沈黙が広がる。

自分たちはあのオネスト大臣に反旗を翻し、帝国の改革に努めてきた。

しかし自分たちがオネスト大臣に反旗を翻せたのも、オーレリア・グラディウスという絶対的な存在が自分たちのバックアップに回ってくれたからだ。自分たちの後ろには帝国最強の將軍がいる、という事実から得られる安心感は思いのほか大きい。そんな精神的支柱が、帝都から離れざるを得ない状況に陥っているのだ。考えがあるといても、不安はそう押し込めておけるものではない。ブドーが絶対に自分たちに協力してくれるという確証がないこの状況下では尚更だ。

だが誰もその未来を考えないようにはしていた。負の感情に支配されてはならないと。皆が皆、前を向こうと必死に考えないようにはして

いた。

しかし暗い現実を突き付けるかのようなその言葉は、必死に未来を変えようと足掻く皆の心に暗い影を投げかけてしまった。

「……………」

完全に失言だった。今、投げ返てもいい言葉ではなかった——そう悟ったその政務官が慌てて謝罪の言葉を述べようとしたその時、オーレリアが先に口を開く。

「——その時は私が全ての責任を負います」

そう言つて、オーレリアは皆を安心させるかのように微笑む。

「せ……責任とは？」

恐る恐る問うたチヨウリにオーレリアは聖女のような微笑みを浮かべたまま首を横に振るう。

「それはチヨウリ殿が気になさることではありません。貴方たちはただこの帝国の為に——そして民のために前に突き進めばいいのです。それが私の……唯一の願いです」

物腰は柔らかいが、それは明らかに拒絶の言葉だった。

これ以上は自分だけが背負う領域。貴方が踏み込む必要はないという拒絶の言葉。

それは明らかに自分たちに被害が及ばぬよう、自分たちを護る為に告げられた言葉だった。

「では残された時間も少ないので私はこれで失礼します」

オーレリアは身を翻す。その琥珀色の双眸に、凄絶なまでの覚悟を宿らせて。

。 帝国改革派の存亡を賭けた一つの決戦が今、始まろうとしていた――

## 第6話

グラデイウス家先代当主——オーレリウス・グラデイウスは、同じく將軍の家系に生まれたブドーとは共に認め合う好敵手ライバルであり、戦友ともだった。

ブドーとオーレリウスは国の情勢を憂いていた。

このままでは千年栄えてきた帝国が滅んでしまうと。

大臣の暴政によって墮落しきつたこの帝国を立て直さなければならぬ。

だからこそまずはこの帝国の存続を脅かす外部からの敵を処理する。外敵を全て始末した暁には自分たちの手で民を先導し、この国を立て直そうと。

ブドーとオーレリウスは互いにそう、誓い合っていた。

そんな彼が北の戦乱で戦死した報せを耳にした時、ブドーは我が耳を疑った。グラデイウス家に代々伝わる帝具を継承し、千の光刃で戦場を蹂躪するオーレリウスの実力は間違いなく屈強な人材が揃う帝国の將軍たちの中でもトップクラスであったからだ。

——また一人、大切な同志を失った。

ブドーは大きな喪失感を抱いていた。共に国を救おうと誓い合い、その為に日々を戦い抜いてきたはずだった。

周囲にはオネストの息がかかった敵しかいなかったとしても……彼がいてくれたら乗り越えていけると。大將軍であるブドーにとつてもオーレリウスは大きな精神的な支えだったのだ。

決して血のつながりはない自分でさえ、そうなのだ。オーレリウスの愛娘であるオーレリアが心にどれだけの傷を負ったというのか。

しかし彼女オーレリアは一日とまたずとして現れた。ブドーが日々、兵を鍛え、己が鍛錬を行う練兵場に。

啞然とするブドーを余所にオーレリアは静かに口を開いていた。

——父はこの国を愛していました。いつかはお前も將軍となり、この国の繁栄の為に力を尽くすのだと、そう言い聞かされてきました。

ですが私は戦う術を知らない。今の私には……何もできない。

だから私は……強くならなければならぬのです。

一般兵に配給される一振りの剣。華奢で小柄な彼女の身体では支えきれない不釣り合いなその剣を携えた彼女は、その琥珀の瞳に悲痛な涙を湛えながらもそう言っ、微笑んだ。

戦で父を亡くし、周りには將軍の名門グラディウス家の持つ莫大な遺産を狙うハイエナのような大人達が舌舐めずりをして好機を覗いている。

厳しい現実——腐敗しきつたこの帝都の現実——たった一人の少女に家族を失った悲しみに涙を流すことすら許さなかったのだ。おそらく、このまま何もしなかったら、満足に剣も持てないこの弱い少女はこの腐敗した帝都の荒波に揉まれて瞬く間に潰されるだろう。

この過酷な世界を生き抜く為には何よりも力が必要。その事実を誰よりも理解しているからこそ彼女は、この場所<sup>練兵場</sup>を訪れたのだろう。

本来なら教えを請うはずだった父に先立たれ、唯一頼れるのは父親の親友であり、大將軍である自分以外いなかったが故に。

そしてその父親の代わりに彼女を鍛えるのは親友である自分の使命なのだ。と練兵場に現れたオーレリアを見て、ブドーはそう悟ったのだ。

「お前がこの練兵場を訪れるのは何年振りだ——オーレリア」

「修行の為に祖国を回る以前からだと思えますので……およそ五年ぶりかと。ブドー大將軍」

あれから五年後。今、こうして自分の前に立つ帝国が建国されて以来、最年少の將軍はそう言っ、丁寧に頭を下げた。

「それで何用だ？ 確かお前は西の異民族の討伐任務が与えられたと聞いているが」

「はい。ですから、私は貴方に頼みたい事があるのです」

オーレリアはブドーを見据える。その瞳に込められた明確な覚悟をブドーはすぐさま見透かした。が、ブドーは自分から動かない。

しばらく押し黙っていたオーレリアであったが、やがて静かに一

つ、息を吐きだすとブドーに向けて告げる。

「私が西方征伐で帝都を不在する間、私の守護する帝国改革派の者達を護つて頂きたいのです」

その先の言葉は言わなくてもわかる。オネストの魔の手からだ。

「……」

ブドーは押し黙ったまま答えない。

「武官は政治に口を出すべからず——ブドー大將軍の考えは理解しております。しかし今はそのような事を言っている場合ではない事くらい貴方も理解しているはずですよ」

今が立ち上がる時なのだと、オーレリアは告げる。

「陛下は厳しい現実を目の当たりにしながらも逃げませんでした。最後まで国のため、民のために戦い抜くと告げたのです。」

——陛下が戦うと決めた今、陛下の盾であり、剣である我らが立ち上がり誰が立ち上がるというのです!」

——俺とお前、二人で帝国を建て直すんだ。俺たちならできるさ。なあ、ブドー。

力強く込められたオーレリアの言葉。

その時、ブドーは記憶の彼方でオーレリウスから語られたかつての光景を幻視した。

「余からも頼む、ブドーよ」

「!」

修練場に響く、幼くも凜とした威厳のある声。

オーレリアと共に修練場の入り口を見ると、そこには今、この場にはいないはずの皇帝の姿があった。

「すまぬな……たまたまどこかへ向かうオーレリア將軍の姿を見かけてな。悪いとは思ったが後をつけてしまった」

慌てて膝をつこうとするオーレリアにそのまままでよいと制した皇帝はそのままブドーの前へと歩んだ。

そして——

「すまなかった」

ブドーに向かって頭を下げたのだ。

思いがけない皇帝の行動にオーレリアもブドーも言葉を失った。

「な——」

「頭をお上げください！ 皇帝陛下！」

ブドーの言葉にしかし皇帝は被りを振って頭を下げ続けた。

「余が不甲斐ないばかりに帝国は乱れ、腐敗しきってしまった。ブドーにもたたくさん迷惑をかけてしまったな……」

「そのような事——」

「だがな」

ブドーの言葉を皇帝は静かに遮った。

「もう諦めたくないのだ。余は皇帝としてあまりに未熟だとしても、帝国がもはや救いようのないところまで堕ち切ってしまったとしても」

千年続いた帝国としての歴史を。

その歴史を築き、今も支えて続けてくれている臣民を。

今は遠き、理想と平穩を。

「諦めたくは、ないのだ」

そう告げて顔をあげた皇帝は、目尻に涙を浮かべながらも毅然とした笑みを浮かべていた。

「——っ！」

そんな皇帝の姿にブドーは衝撃を隠さなかった。

あの皇帝陛下が。

大臣の操り人形にされるがままだった幼子が。

今、こうして自分の足で立って志を新たに立ち上がっている。

対して自分はどうか。

いつしか家訓に囚われ、自ら動くこともせず。

今は亡き友との約束からも逃げ、大將軍としての職務を理由に現実から目を背けていた。

（私は……私は今までいったい何をやっていったのだ！）

あまりの情けなさに涙が出そうになる。

しかし、涙を流す事は許されない。

今、眼前にいる幼き皇帝が懸命に堪えているのだ。そんな陛下を差

し置いて己の不甲斐なさを嘆いている場合ではないのだ。

「陛下……」

ガシャン、と鎧を鳴らし、ブドーは膝跨いだ。

皇帝のその小さな手を取り、告げた。

「陛下のご覚悟しかと受け止めました。そして改めて誓いましょう。我は陛下の盾——この身に代えても陛下を護り続ける事を」

その言葉に皇帝はぱあっと、顔を明るくさせた。

「ありがとう……ありがとうブドーよ！」

改めて皇帝に向かつて頷いてから立ち上がったブドーは、その光景を見守っていたもう一振りオーレリアの剣を見据えた。

「オーレリアよ、今まで陛下を護り、導いてきてくれた事……感謝する」

「お礼など結構です。これから先、陛下のお力になってくれるのであれば」

——それにブドーさんが力になってくれるのなら百人力ですから。そう言つてニヤリと笑つたオーレリアの表情は普段の將軍としてではない、かつての親友の愛娘として、そして修練場で共に鍛錬に明け暮れた愛弟子としての表情だった。

そんなオーレリアにブドーもまたニヤリと不敵な笑みを返した。

「ああ、任せておけ。帝国改革派の者たちはこれより我が軍の庇護下に入る。オネストには指一本触れさせやしない。だからお前も早く帰つて来い。帝国の夜明けはこれからのだからな」

「当然です」

今ここに最強と最強が一つに結ばれた。

これを機に帝国内部の勢力図は大きく変わっていくことになる。変革の時は近い。